



北大雨竜研究林でシラカバの育成について語る吉田俊也教授＝幌加内町（宮永春希撮影）

シラカバ 伸びる可能性

北海道を象徴する樹木シラカバ。道内各地に自生し、防風林としてもなじみ深い。その木肌の白さを生かした家具・内装を備えたゲストハウスが、今月下旬に上川管内東川町中心部にオープンする。3棟のうち1棟はテーブルや椅子、台所の棚などがシラカバでできている。部屋には明るく開放的な雰囲気、施工した町内の家具メーカー「木と暮らしの工房」代表の鳥羽山聡さん(54)は「地元の木を使った部屋で北海道の雰囲気を味わってもらえれば」と期待を込める。

鳥羽山さんは、旭川近郊の家具会社や研究者などでつくる一般社団法人「白樺プロジェクト」（事務局・旭川）の代表。同プロジェクトでは、大半がパルプ用チップに加工されていたシラカバを、さまざまな商品に生まれ変わらせている。

シラカバは同じ広葉樹のミズナラやアオダモと異なり、不遇な扱いを受けてきた。ミズナラやアオダモは高度成長期に家具材などとして価値が高まり、道内でも大量に伐採された。対してシラカバは、60年程度の樹齢を超えると病原菌で幹まで腐るリスクが高まったり、家具材にするには太さが足りなかったりと、マイナス面ばかりが目が行きがちだった。

だが、道立総合研究機構林産試験場（旭川）の専門研究員秋津裕志さん(62)は8年ほど前、荒地でも日が当たれば育ち、他の広葉樹に比べて成長が早いといったプラス面に着目。「うまく加工すれば、価値が生まれるのでは」と研究を始めた。すると幹などはクルミやサクラと同程度の強度と分かり、丸太を家具の材料にする道を探った。その過程で鳥羽山さんと知り合い、2018年に白樺プロジェクトを立ち上げた。

プロジェクトに賛同した会社や工房が、家具をはじめ部屋のフローリング材や内装材などに加工し、ギターやハープといった楽器にも使用するようになった。樹液成分を含む化粧水や樹皮のかご、木の器なども少しずつ人々に浸透してきた。

プロジェクトの新たな目標は「持続的に使えるように、植えて育てること」。担当する研究者は、造林学が専門で北大北方生物圏フィールド科学センターの吉田俊也教授(55)だ。

普段は北大雨竜研究林（上川管内幌加内町）などで持続可能な森づくりを研究する吉田教授は、シラカバの「育てやすさ」を指摘する。例えば植林する際に、かき起こし（地表をはいでササ類の根や病原菌を取り除くこと）が針葉樹より浅くて済み、苗を定植しなくても種子が定着すれば育つ。「スギなどの針葉樹のように、育成から伐採までを計画的に育てることができれば、林業として扱うことが現実になる」。シラカバが秘める可能性を信じている。

（和泉優大）＝18面に続く



家具や内装にシラカバを活用したゲストハウスを施工した「木と暮らしの工房」代表の鳥羽山聡さん＝東川町

サタデーどうしん

葉から皮まで余さず

シラカバは幹だけでなく、樹皮・樹液・葉など、丸々1本を有効活用できる。そのため「白樺プロジェクト」のメンバーや賛同者が販売する商品は、実用品や飲料など多岐にわたる。

ハーブティー

(リアンファーム・旭川市)
有機栽培した10種類前後のハーブに、乾燥させた白樺の若葉をブレンドしたハーブティー。「デトックス」「夏」「びはだ」の3種類があり、各15袋入りで1200円。ポットに1杯分(約1袋)入れ、熱湯を注いで5～10分蒸らす。

シラカバは「抗酸化作用や美白効果が期待される」(石田佳奈子代表)という。リアンファームのホームページから購入できる。



木の器

(工房大崎・オホーツク管内置戸町)

輪切りにした丸太を削った「シラカバボウル」と、アイヌ民族の器「ニマ」を模した「シラカバニマ」。制作者の大崎麻生さん(54)は「原木から切り出すので一つ一つ違う



形を楽しんでほしい」と話す。価格は2千円前後から1万4千円くらいまで。置戸町内のオケクラフトセンター森林芸館で販売。問い合わせは同館0157・52・3170へ。

樹液ドリンク

(松山農場・上川管内美深町)

美深町で採れた樹液100%の「森の雫」。ほのかな甘みと木の香りを感じられる。樹液の採取期間は春先の2週間だけ。採取開始から35年になり、ビールやそばの原料にも活用されるなど用途が広がっている。1本324円(180ml)。道の駅「びふか」のほか、道内外の土産物店で販売されている。問い合わせは松山農場01656・2・1781へ。



スツールとテーブル

(木と暮らしの工房・上川管内東川町)

切り株のように見える商品「LAKAN VA (ラカンバ) -1」。丸太から、リンゴの皮むきのように樹皮を12～20mmの幅でむき、合板で作った枠に巻き付け、接着剤で固定した。工房の鳥羽山聡代表は「樹皮をはいた幹は家具に使え、シラカバを余さず使える」。スツールは6万3800円、テーブルは41万8千円。問い合わせは同工房0166・73・9202へ。



カードケース

(クラフト&デザイン タンノ・旭川市)

木肌が白みを帯びたシラカバ材を使用したカードケース。木工作家丹野則雄さん(71)が今年6月、これまで別の樹種で作っていたカードケースのシリーズに加えた。縦10.5cm、横7cm、厚さ1.4cm。「木目が強いわ



けではなく、さらっとした手触り」(丹野さん)が特徴だ。上川管内東川町の「木と暮らしの工房」で、1個8250円で取り扱っている。

いすとテーブル

(樹凧工房・上川管内美瑛町)

樹皮を残したシリーズ「Retakkar (レタッカ)」。座面や天板には木目の変色部「偽芯」のある木材をあえて使ってい

る。「家具では欠点だと思われていたが、特徴的で個性が出る」と、工房代表で白樺プロジェクト副代表の杉達浩昭さん(53)。椅子は5万2800円、テーブルは20万3500円。問い合わせは同工房0166・96・2448へ。



商品写真はいずれも白樺プロジェクト提供

釉薬にシラカバの灰

旭川の陶芸家・工藤和彦さん

シラカバの有効利用を探る「白樺プロジェクト」。美しい木肌が際立つ家具や内装などとどまらず、意外なものにも活用されている。旭川市の陶芸家工藤和彦さん(52)は同プロジェクトの賛同者。12年ほど前から、陶器のコーティングや装飾に用いる釉薬にシラカバの灰を使い、北海道らしさが表れた作品を生みだしている。

爽やかな白色が特徴の作品シリーズ「白樺ホワイト」は、シラカバの釉薬を使う。柔らかい風合いを出すため、白い泥を鉄分の多い粘土に塗る技法「粉引」で制作する。白樺ホワイトに改良を加えたシリーズ「白樺刷毛目」は、はけを使って白い泥を塗る。焼き上がった時に、白い泥が薄い部分に灰色の筋が現れ、シラカバの幹を連想させる。

工藤さんは信楽焼で知られる滋賀県甲賀市で修業し、1993年に上質な粘土が採取できる上川管内剣淵町に移住。その後、旭川郊外に工房を構えた。「北海道は陶芸家にとって可能性



白樺ホワイト(手前右)と白樺刷毛目(手前左と奥)に込めた思いを語る工藤さん

のある土地。北海道らしい焼き物を作りたいという思いがあった」と移住当時の夢を語る。

転機が訪れたのは2010年ごろ。工藤さんの子どもが通っていた小学校で、倒れる恐れがあったシラカバが伐採された。木を譲り受けた工藤さんは灰を釉薬に使うことを思いつき、新シリーズ「白樺ホワイト」を生み出した。

工藤さんはシラカバの良さを取り入れた自身の作品について「この地で自分が採取した粘土と、自宅のまきストーブから取り出した灰で作ったもの。北海道に住み、北海道で作るからこそ意味がある」と強調する。

森づくり語り合う

旭川などで「サイエンスカフェ」

一般社団法人「白樺プロジェクト」は啓発活動にも力を入れている。シラカバの有用性を市民に伝え、持続可能な森づくりについて考えてもらうため、シラカバをテーマに専門家と市民が語り合う「サイエンスカフェ」を昨年始めた。旭川や近郊で年4、5回実施し、今年2日には上川管内東川町で、樹皮の特徴や活用法などを紹介した。

会場では16人の参加者を前に、道立総合研究機構林業試験場(美瑛)の研究員が「国内でも樹皮を使った工芸品の人気は上昇している」と紹介。樹皮は、はがれやすい夏に取り、森林に残った幹が変色しないよう数カ月以内に伐採すれば、樹皮も丸太も有効活用できると説明した。

イベントでは、大阪の工房がシラカバを使って制作したアコースティックギターの演奏も行

シラカバを使ったギターの演奏を楽しむサイエンスカフェの参加者=2日、東川町



われた。町内のギタリスト新原草太さん(39)が、スウェーデンの民謡やオリジナル楽曲を披露。新原さんはこの日、初めてシラカバのギターに触れ「高音がとてもきれい」と評価した。

会場は昨年4月にオープンした「ジャム&カフェTamJam(タムジャム)」。家具や天井、建具をシラカバ材でしつらえた。店主の田向隼人さん(40)は白樺プロジェクトに賛同し、自身も山に入ってカウンターに使うシラカバを選んだ。「白くて明るいので、店内が柔らかい雰囲気になる」と満足そうに話した。